

# 人間が、いかにして人間をとり戻すか

— 私たち自身の自決権を回復するための具体的な一提案 —



赤坊画

江口幹

## 初夜の無い結婚式なんて

— いわゆる石油危機は、日本の高度経済成長路線を挫折させた。それにともなって、省資源型経済構造への転換、物質主義の反省、新しいエネルギー資源開発への努力、などが叫ばれている。それらは、いかにも必要なことではあるが、それら多くの議論には、残念ながら最も根本的なものが欠けているように思われる。いわゆる石油危機以後の社会情勢が示した最

大の問題は、経済の巨大化と寡占化の中ですではっきりとかがわれたことであるが、今日では、各個人が自分の生活のあり方を自主的に決めえない、個人生活が一握りの少数の人々の意向でどのようにも振り廻されるものだ、という恐るべき状況を、いやおうもなく露骨に見せつけたことである。したがって、いわゆる石油危機が提起した課題の最も基本的なものは、各個人が自分の生き方を自分で決定しようとするような政治・経済の仕組の確立であり、自決権の奪還である。いいかえれば、操られる存在であることを拒絶して、人間であることを回復するための、

## 人権の闘いである。

近頃、何が愉快だといって、いわゆる石油危機ほど愉快なものはない。日本の高度経済成長は、安い豊富な資源が、いつでも、好きなだけ、安く買いたたいて買える、という基盤の上になりたっていただけに、主要エネルギー源である石油の供給を削減する、というアラブ諸国の戦略の前に、日本の政財界は、周章狼狽してなすところを知らず、という按配だったし、恥も外聞もなく、あたふたと三拜九拜のための特使を送ったところなどは、突如転落を強いられた成金の中年マダムが、それまで鼻にもひっかかかなかった男の気を惹こうとして、一糸まとわず、しなびかけた乳房とつぶりとたるんだ腰を振り、恥部も丸だしにして、懸命にストリップを演ずる囃にも似ていたし、近來何が見物だといって、そんな慌てぶりほどの見物はなかった。

前々から、高度成長による自然と人心の荒廃を指摘し、経済の縮小と自然と人工との何らかの均衡の確保こそ必要だ、といったもし書きもしてきた私としては、土建屋のオヤジ某君が、ネ、アナタ、ソデショ、と汗を拭きつつ、《列島改造》とやらに狂奔して、この日本の自然とそこに住む私たちの暮らしを、破壊に追い込んでゆくのを阻むこともできない、その無力を嘆じていただけに、私たち自身の力ではなく、外圧という悲しい形によってではあっても、高度経済成長路線の棚上げが強いられ、カクエイ君が顔面神経炎とやらいう初めて

聞く病気ゆえのふくれっ面をして、しどろも反省の弁を語るのを耳にするのは、何とも痛快きわまりなかった。久しぶりに溜飲が下がり、ざまあ見やがれ、という次第、あれ、俺にはサディストの気があったのだからかと思ったほどで、まさに、神様、仏様、アラブ様だった。

そして、長らく絶えていた希望が私の中によりみがえってきたのだった。私は、人間と自然とを荒廃させる経済から、人間らしい暮らしのできる経済への転換が、これを機会に行われるのではないかと感じ、その方向への歩みだしを期待して、事態の推移を注意して見守っていた。ところが、その期待の甘さに、私は次第に気づかざるをえなかった。いわゆる石油危機の作られた性格がかなり判然とし、価格はともかく量については当面それほど心配はされない、という状況が確定するにつれて、経済構造転換の声はどこかにはうやむやに消えてゆくようだし、あるべき転換は行われようとはせず、ただ従来そのまま、《狂乱》するインフレだけが残り、という事態になってきたからである。

それに、転換の方向についての議論そのものも、私には気に入らないものだった。曰く生産第一主義の反省、曰くインフレと公害を抑止する安定成長化、曰く省資源型工業を、曰く能率を第一義とした国際分業体制にもとづく加工貿易型経済への反省、曰く福祉重視の政策を、曰く自主性のない、大國にのみ顔を向けた外交の反省、曰く枯渇しない国産可能な

人間が、いかにして人間をとり戻すか

エネルギー資源開発の促進、等々。いずれもごもつともだけれども、私には初夜のない結婚式のような議論だと映った。なぜそこには初夜が、肝心なものがないと映るのか。それを明示するには、いわゆる石油危機以来現実起きたことを、改めてもう一度振り返ってみなければならぬだろう。

アラブ諸国の石油供給の対日通告以来、庶民の生活の上にとだちに現われた影響は、灯油の確保難ということだった。冬を控えて、暖房の燃料を事欠きたくはない、と思うのは当然だから、何とか灯油を入手したい、と石油小売店の顔色をうかがう生活が始まった。少々高くいわれても仕方がない、と思いつまざるをえない生活である。しかも、いくら高くても手に入るのならまだいいが、その見通しがはっきりしなかった。そこで何か代替のものを、ということ、たとえば煉炭を購入した人たちがいた。そして彼らは、煉炭がものすごい中毒性の燃料であることを、今更のように思いだしたのだった。

私の知り合いのある主婦は、一日煉炭をたいてたちまち中毒して寝込んだが、  
「昔はボロでたてつけのわるい家に住んでいたせいかしら、一部屋に煉炭火鉢を二つおいても平気でしたのに」と、ほろ苦い笑いを浮べていった。

また私の近所の一人住いの老婦人は、やはり煉炭に中毒して手足が動かなくなり、便所にゆこうとして、何とか這いな

から近づいたものの、途中で失禁してしまったのだった。

おそらく、こんな例は各地にあったに違いないが、そうして人々は、灯油に頼るまいとして、かえって灯油のかけがえのなさを知ったのである。というより、いつの間にか、何の相談もないままに、灯油なしでは暮してゆけないような、灯油を買わざるをえないような、そんな仕組の中に追い込まれている自分たちを知った。昔のように、その辺で薪をとってきて燃やすこともできない、炭も石炭もまあない、火鉢も石炭ストーブもまずない、という生活である。

そのうちにものの値段という値段が上がった。三割上がり、五割上がり、二倍になり、三倍になる、という気違いじみた上がり方だった。それに対して消費者たちは、自分たちの無力をかこつよりほかに大してなすすべを知らなかった。自分たちとは無関係に生活が行われ、その製品を買ひ込むように知らず知らずのうちに慣らされ、挙句がポイという大幅値上げである。消費者たちは、自分たちがいかに翻弄されやすい哀れな存在でしかないかを、骨身に染みて悟らねばならなかった。そして、比較的値のほらない、保存の利くものを少しでも買ひだめしておく、というのが、消費者たちに残されたせめてもの自由だった。

こういう実情を見る時、問題は、流通過程における悪徳の除去だとか、正確な情報の必要だとか、のんびりと議論していられるものだろうか。もっと根本的に、誰かが計画し決定

すること、それにしたがって操られるままに拒否すること、私たちが私たち自身で自分の生き方を決める仕組を作るべきだ、いいかえれば、生産から流通にいたる社会全般にわたって、大衆自身が管理する仕組にすべきだ、という発想ができて当然ではないか。

そして、いわゆる石油危機以後の、転換のための提案のいづれもが、初夜を伴わない結婚式のような、と感じた私はまた、提案をする《諸先生》方の口吻も気に入らなかった。一言でいえばそれは、将棋の駒を動かす人たちの口の利き方である。俺のいつているようにすればあんたたちは幸福になれるんだよ、といういい方で、換言するなら、少数の意志決定者の意向次第で社会を運営する、現在の中央集権的な機構はそのままにしておくという前提の上で、右からのものにせよ左からのものにせよ、何らかの政策いじりをやれば、それで大衆は救われるのだ、といった発言の仕方である。しかし、いわゆる石油危機以来の社会情勢の中で、私たちが痛感せざるをえなかったのは、誰からにせよ、もう動かされることはいやなのだ、私たち駒が、自分で動きたいのだ、ということではなかったか。

### 商品が侵した人間の間柄

二 高効率と低コストと安定的な大衆収奪を目指した、巨大

な経済の寡占体制、大量生産・大量消費という集中的な経済体制は、速やかに解体されなくてはならない。それは、石油供給の鈍化で《節約の時代》に入ったからではなく、もともと私たちが、人間らしい生活、意味のある仕事をする機会、人々と心を通わせる機会を奪い、自決権を奪っていた性格のものだったからである。

私はこの頃、いい文章にせよ、いい焼きものにせよ、おいしい食べものにせよ、それらが与えるさわやかな充足感、不思議に共通した性格のものだ、あえていえばほとんど同じものだ、と今更のように感じて、その意外さにわれながら驚いている。たとえば私は、吉行淳之介氏の文章が好きなのが、氏の数頁を読む満足にしても、たとえばまた私は、最近若手の優れた陶工として、中里重利氏を発見して大変嬉しく感じているのだが、その重利さんの唐津の茶碗を両手にいだく折の満足にしても、たとえばまた私は、近所のごく若い仲睦まじい夫婦だけでやっている和菓子屋の、一箇三十円の栗饅頭が好きなのだが、その栗饅頭を口に含み白飯がとけてゆく時の満足にしても、その充足感のさわやかさはほとんど変わらない、と感ずる。

考えてみると、そこには確かに共通の性格があるようで、それは言葉で説明するのは難しいが、過不足なく満ち足りた感じ、何か物足りないな、一寸どぎついなといった思いを伴わない充足感、とでもいおうか。いずれにも通じていえるこ

とは、手で作られたものであること、さりげない形でしか提示

示されていないが実に入念に作られていること、作り手たちが納得ゆくまで心をこめたものであること、彼らは何よりもまず自分自身が納得できるものを作ろうとしたこと、といってそれは他者を拒絶しているのではなく、自分たちが心をこめたものを理解する人々をどこかに期待していて、そこで作り手と受け手との間に心の通い合う関係が成立していること、だろう。それ故に、私が例にあげた三つのは、それぞれ全く異質のものでありながら、味わっているうちに私の心に染みわたり、満ち足りた思いで限なく私を浸すのである。

しかしそれにしても私は、そういう充足感を得られる機会が何と少なくなつたのだろうか、と思わずにいられない。何という索莫たる時代か、と思わずにいられない。それがなぜかといえば、その理由は簡明で、私たちの生活の全面に商品が浸透し、人間同士が、心を通わせる間柄ではなく、単に金を交換し合うだけの間柄になつたからである。そういういい方が抽象的にすぎ、粗雑にすぎるのなら、私たちの日常生活のそこそこから、具体的な事例の二、三を採取して、それに観察を加えてみることにしよう。

まず東京郊外のある団地での、オーストラリア産牛肉安売りを待つ、長蛇の列の中の若い主婦たちの会話。

「いやなのよ。うちの子つたら、カツだって、本当のお肉のカツは食べたがらないの。ハムカツでないと、カツじゃない

ま。エスカレーターは静かに上がってゆく。

東京のある路上で。

私は何年ぶりかで若い友人に出会つた。ひどく無気力な感じに変つている点が私を驚かせた。聞くと、中規模のメーカーの総務課に勤めているという。

「何をやっているんだい?」

「印刷屋ですよ」

「印刷屋って?」

「いろんな会議の設営をやるのがぼくの係なんです。その資料の刷り屋ですよ。この頃は、手軽な印刷機が増えたでしょう。だから、大抵のものは社内です。それで、刷り屋。紙に刷つて、折つて、ホッチキスで止めて、来る日も来る日もそればかりですよ」

「大変だな」

「まあ、人並みの給料はくれるから仕方ないですけど。――

近頃、馬をやっているんです」

「馬?」

「競馬ですよ」

東京都心に向かう朝のある通勤電車の中で。

皆が黙々としている車内で、中年のサラリーマン二人だけが話している。やや上役らしい方が声が大きい。

「近頃、円が下がったろう?」

「ええ」

つていうのよ」

「ハムカツ? ハムカツってなあに?」

「あら?! お宅、まだ子供さんがお小さいから知らないのね。学校の給食でね、ハムを薄く切つたものに衣をつけたカツがでるのよ。だから、カツっていうとそんなもんだって思つて

るの」  
「あーら。じゃ、それ、今風の《オフクロの味》ね」  
ある東京のデパートのエスカレーターでの、中年の主婦たちの会話。

ゆっくりとエスカレーターが上がってゆき、左手に洋品売場が見えはじめ、そこにある皮の肘当てのついたセーターが眼に入ってくる。

主婦A「うちの子、新しいセーターに肘当てをつけてくれるのよ。今あんなのが流行しているのね。なかなか痛まなくて助かるけど」

主婦B「あら、お宅では肘が抜ける?」

主婦A、警戒したような顔付きで、チラーとBに視線をやり、沈黙する。

主婦B「うちじゃ、肘が抜ける前に子供の方が大きくなつちゃうわ。だから、いつもセーターは他人様にあげちゃうのよ」

と、一本とつたという表情で、明らかに誇らしげ。  
主婦A、何かいいかけるが言葉にならず、口をつぐんだま

「あれでガツカリしているんだ」

「海外旅行でもされるんですか?」

「そうじゃないんだ。ぼくもね、やっと年俸一万ドル、あちらじゃ(と、アメリカを指していうらしく)学卒者の初任給らしいんだけど、やっとその線までいったと思つたら、このところの円の値下がり、またドレーンさ」

上役らしい方は、周囲の人々に十分通るほどの声でいい、大して残念でもなさそうな口調だった。

さて、日常生活の中からここに拾つた四つの事例は、私たちが現に暮している、高度な工業化に立脚した、大量生産・大量消費の社会構造を、如実に浮き彫りしているように私には思われる。

まず作り手の方からいえば、想起されるのは私の若い友人の例である。大学時代の澁刺さに比べて全く生気を奪われたような彼の変貌に私は一驚したが、そこに今日の生産者の姿を重ねてみても、それほど間違いはあるまい。彼は事務職員であるが、刷るために印刷機のボタンを押す、あとは自動的に印刷されるのを見守っている、それから折り、ホッチキスで止める、といった機械的な作業をする、というのは、今日の生産労働者のあり方とさして変りがない、あるいは、その中の楽な方だ、といえるだろうと思われるからである。

彼の場合、特徴的なことは、仕事に対して何の愛着も持っていない、ということだろう。愛情を持ってないのも道理で、

私はこの頃、よく東京の下町を散歩する。第一に未知の土地であって面白いからだし、第二に、そこにはコンクリートと自動販売機の街にはなくなったもの、人の心と心との交流がまだ残っているように感ぜられるからである。たとえば、私は先日、初めて柳橋にいった。物珍しげにこの町を歩き、何となく気に入る、黒板塀の料亭の座敷で芸者をあげる代りに、通りがかりに見かけたソバ屋に入り、カケを着にしてお銚子を一本飲んだ。酒もソバもうまかった。うまいじゃないか、と思いつつ私は、そこにこの町の文化というものを感じたのだった。

だった。

### 親愛の情の出会い場所

三 現行の巨大な、寡占的な、集中的な経済体制の解体のあとに、各個人の自決権と、生きる意味と、他者との心の交通を回復させるものとして、最低限の生活必需品を自給しうる、ある程度自給自足が可能な、適正な規模による、地方的な経済圏が樹立されねばならないだろう。それは大衆自身によって管理されねばならないだろう。そこに想定される社会は、政治的には各個人の自由な発意と自由な合意に立脚する直接民主主義社会であり、経済的には、経済が労働者組織によって管理される自治管理社会であり、行政的にはコミュニティ連合社会だろう。

私はこの頃、よく東京の下町を散歩する。第一に未知の土地であって面白いからだし、第二に、そこにはコンクリート

彼に要求されるのはごく末梢的な神経の働きと、機械的に手を動かすだけのことで、そこには力を尽す、自分を活かして何かをやる、という創造的な喜びとはおよそほど遠いものがある。勢い投げやりになる。また、悲しいことには、その程度で十分足りるのである。実際に仕事をするのは機械である。機械がやったことだから、作りだされたものへの愛もない。作りだされたものを使う人々への愛もまずない。彼は、機械によって、自分自身とも他者とも交流することを拒絶される。ほとんど無意味なことをしている、孤立した自分を見出して、深い徒労感に襲われる。そこで彼は、こうすればともかく金が入る、ということだけを考える。金を使う楽しみだけを考へる。そこで彼は、消費者へと顔を変えるが、さて消費者を待ち受けているものは何か。ここで私は、ハムカツだけを好む子供のことを思い起こす。

この少年は、バヴロフの条件反射の典型的な事例だ、とはいえないだろうか。ベルが鳴ると同時に餌を与えられ、遂にベルが鳴るとそれだけで唾液をだすようになった、あの犬にハムカツの少年は似ていないか。いや、今日の消費者のほとんどがそうなのではないか。自分自身の真の必要から、あるいは自分の本当の好みにしたがって買うのではなく、買うように条件づけられ、刺戟に反応しているだけではないのか。

刺戟に応じて買うだけだから、買う品物に本当の愛は抱いていない。それがないから、作った人への愛もない。したが

って、買うという行為の中には人と心を通わせる関係がなく、それ故に真の充足もなく、ただ金を使った、使える身だ、という痛ましい満足しかない。それは、自分の金力を密かに誇示してみせる、肘の抜けないうちにセーターを使い捨てるマダムや、年俸一万ドルそこそこの中年サラリーマンの、あの陰湿な喜びである。

こうして、機械生産の大規模化と、それに伴う巨大な組織を通しての商品の生活全面への浸透の中で、かつては存在していた、作る喜び、作った人への感謝、作られたものへの愛、大切にものを使う心は失われ、機械と組織を介して人間同士の結びつきは分断され、人々は荒涼たる心の砂漠に生きる身となった。

そして、その原因であるほかならぬ商品の生産と消費への、生活の中の依存の甚しきこそが、私たちが自分自身で自分の生き方を決められない、大きな要因の一つなのである。したがって、私たちが、単に飢えない状態に満足することなく、自分の流儀で生きたい、意味のある生き方をしたい、人と心を通わせる生き方をしたい、と望むならば、エネルギー資源の供給不足という外圧の故ではなく、私たち自らが進んで、大量生産・大量消費のシステムを解体しなければならぬだろう。しかも周知の如く、その同じシステムが、自然環境を破壊し、私たちを生存不能な破局へと追い込みつつあるのだから、その解体の必要は、もはや異論の余地のないこと

たとえばまた、私は時々浅草の天井屋に通う。少々酒を飲み、天井を食べにゆくのだが、実をいえば私は、この店の江戸前の天ぶら、衣を厚くして、甘さも辛さもしつこい天津汁を用いる味付けを、あまり好まない。しかし、この店にはほかにはないかけがえのないものがあって、その雰囲気に着かされてゆくのだ。いわばそこは、店の者と客との、親愛の情の出合う場所である。この店は、大正時代から評判を呼んでいて、長い常連の客も少なくなく、今でもどちらかといえば年配の客筋が多いように見受ける。ほかでは一寸見られないような、年輪を刻んだ個性的な顔立ちをした、六十代、七十代の下町の老人たちが、おそらくは年少の頃からのご馳走だった天井を、歯の抜けているらしい口で、しかし実においしそうに食べているのを見ていると、私はただもう嬉しくなってくるのだ。

店の方もそこは心得ていて、近頃の大半の食べもの屋のように、見てくれを飾りたてることはしていないが、おいしいものをだすことには心をこめていて、十八、九の餅を着た娘さんたちが、客が喜んでくれるのが楽しいという風情で井を運んでいる。全く気取りのないのがこの店のいいところで、「二百円の吸物なんか勿体ないから止めときなよ。天井だけいいよ、天井だけで」

といった、辺りはばからぬ声が聞えてくるのである。私はここに、店と客とが年月をかけて育てあげたものを感じ

ずる。食べものを介しての、心の交流の場があると感ずる。そして、人々の共通の暮しの場、町というものはこうなくてはならない、とも感ずる。そしてまた、そんな町が何と少なくなつたらうか、とも感ずる。

しかし、考えてみれば、そんな町がなくなつたのも道理だと思ふ。各個人の生活はあまりにも広域化され、しかも個人個人はあまりに分断されている。通勤に一時間も二時間もかけて職場にゆく、家は寝るだけのもの、隣人の顔も知らない、というようでは、住んでいるところを、自分の生活の場だと思ふこともできないし、大切に育てたい、とも思ふまい。やはり、働く場所でもあり暮しの場所でもあり、見知った人と共に生きる場所であつてこそ、生活の場という意識も、自分たちの町だという意識も湧く。とするなら、私は、広がりすぎた生活圏をもっと縮小することが、人間の生きる意味や人との心の交流の回復のために、私たちの自決権の奪還のために、必要なのではないかと思ふ。

昔、ゾムバルトの『ブルジョア』という本を面白く読んだことがある。もうすっかり内容は忘れてしまつたが、ブルジョアがほとんど強盗同然、時には強盗そのものによつて富を蓄積してゆく過程などが書かれていて、実に痛快だったが、その中に、人間は自給自足の生活から脱した時、独立性を失つた、といった意味のこと、あるいは、そんな風に読みとれることが書かれていたような気がする。

高いものとなり、労働生産性は大幅に低下するだろう。しかし、環境汚染の増大が、生産コストに、廃棄物処理などのためのマイナスの社会的費用を加える必要を教えたように、現行社会下の人間疎外の実態は、生産は、単に能率的で安くあげるという要因だけではなく、大衆が管理しうる性格のものであること、意味のある仕事であること、人と心の交流しうるものであること、といった要素をもあわせて考慮すべきことを、教えているのである。

この社会での生活は、現在のものよりもずっと素朴なものに変わらう。というのも、すでにのべたように、現行の消費生活は、商品需要喚起のための条件づけによる、過度の欲望にもとづいていからである。そして、精神的な満足を主体にした新しい価値意識が生まれるだろう。もっともそれは、経済圏それぞれが多様な地方色を帯びるように、地方色を帯びるだろうし、個人個人の個性をも帯びることだろう。この社会では、画一化は排され、個人に最大限の自由が留保され、共同の社会活動は、自立的な人間の連帯意識にもとづき、相互の協力が各自の自由を拡大するという、その範囲でのみ行われるに違いないからである。

そして、どの経済圏も、完全に自給することはできないから、互いに相補うために、経済圏内で自立した人間たちが協同するように、経済圏それぞれが相互の自由の拡大のために協同し合うだろう。そうして、通信・交通手段のような全国

確かに、自ら耕し自ら漁して食う、という生活ならば独立自存が保たれるだろう。しかし、それではあまりに原始的な生活を全儀なくされるとするならば、人々と相互に協力し合うことによつて、お互いの自由の範囲、享受する生活の質を高めることを考えなくてはならないだろう。

そこで私は、自決権と同時に各種の豊かさを保証するものとして、最低限の生活必需品を自給しうる、ある程度自給自足可能な、適正な規模の、地方的な経済圏を、個人間の協力によつて作りあげることが必要だろう、と思ひいたる。

何が最低限の生活必需品か、何が適正な規模か、となると判定が難しいが、最低限生きるに必要な衣食住を自給しうるには、ある程度の広さが必要だろうし、その中で、自分がどんな役割を果し、またどんな他者の協力を得ているかを知りうるとともに、大衆自身が十分に管理しうる規模という意味では、ある程度の狭さが必要だろう。しかし、私は、現在の通信・交通手段の発達を考えれば、内部的にはコミュニケーション連合である、東北地方、関東地方といった、地方単位程度の独立経済圏でよいのではないかと感ずる。(しかし、これは単に感ずるだけのことであつて、特に根拠はないのだから、別に検討を要することである)

そして、この経済圏での生産は、手仕事と機械生産との一種の混合、といった形態になるのではないかと感ずる。それは、大量生産システムの下におけるよりも、手間のかかる、コストの横断的な活動組織や、全国的なさまざまな調整をする機関が生まれるだろう。そして、全く同じ姿勢で、国際的な規模での協力も行われるだろう。

### 問題は集中的な体制そのものに

四 現在、支配構造が動揺していること、いかなる政治勢力も明確な対策を持っていないこと、大衆自身が解決する以外に道がないところに追い込まれていることは、自決権の奪還——大衆自身が管理する社会建設を目指すには、客観的に望ましい状況にある。また権力の危機に現われるもの、ファッション化に對抗するには、大衆自身による自らの組織化こそ、最上の防壁である。

先日私はある本を読んでいて、通産省国際経済部長の天谷直弘という人の、こんな述懐に出合った。

「戦後、というより明治以来、保守党と財界、官僚はそれぞれ同根の目的意識の上に立って機能分担してきた。要するに富国強兵、生産力拡充、輸出振興といった目的に、がむしゃらに進んでゆけば、それが国民の利益だという意識。ところがこの数年、どうもこれが違うらしい、これだけじゃだめらしい、とそれぞれが壁に突き当たり、考え込んでいる」

なかなか正直な言葉じゃないか、まあそういうところだろうな、と私は感ずる。高度成長を進めてきたものの、公害、

生産環境の悪化、過密・過疎の拡大、所得格差の増大、社会的弱者の貧窮化といった矛盾が激化して、それが権力そのものをゆさぶりかねない危惧を、日本の支配層は痛切に感じていたわけだが、と云ってどうしたらよいか、混乱しているのが実情だろう。しかし、混乱しているにもかかわらず、ともかくも安定的な支配がつづけられたのは、いろいろな文句はあるけど、賃金はどうにか上がってゆくから、ということ、で、各種の矛盾に大衆が眼をつむってきたからである。

だが、いわゆる石油危機以後の高度成長路線の破産、インフレの激化は、これまですでに現われていた矛盾を大きく増幅した形で露呈させるに違いないし、それは権力構造の根底をゆさぶるものとなる。その中で現在の支配層は、《人心を安定させる》明確な対策も、社会的な努力目標も提示しえないまま、場当りの急をしのぎつつ、破局に向かって大衆を追い込んでゆくのではないか。

そして、現在の矛盾を解決するための明確な対策がだせないという点では、野党も同様である。生産力の増大が大衆の福祉を増大する、という現代社会の本質を見抜かない浅薄な信仰の下に、野党は、高度成長を進めてきた権力構造の中で、それを変革するものとしてではなく、その内的な矛盾を少々是正するという役割しか果しえない機関、いしかえれば、そうであることによって体制を相対的に安定させる機関、体制に居心地よく寄生する機関となっていた。経済の巨大化と寡占化、

ということでは同断である。企業と一体化した企業内組合は、高度成長の分け前要求機関に墮し、その限りでそれを支える一要因となっていたからである。しかし、今やその変質の時間が迫っている。

このような状況、矛盾が拡大している、しかし、誰もそれに解決を与えてくれない、という現状の中では、すでに各種市民運動に見られるように、大衆の自立的な組織が自ら立ち上って問題を解決する以外に道がない。しかもそれは、権力の危機に登場する、ファシズムに対する最上の防衛の道である。

戦後日本の支配層の努力は、アメリカ占領下に行われた《与えられた》民主主義的諸施策の定着を阻止し、それを骨抜きにし、労働組合から戦闘性を奪い、教育に国家介入し、自衛隊、警察を強化し、司法を反動化して、支配を安定化することにあった。そして、その安定を補強するものとして働いたのが、高度成長にもとづく幻想だった。

しかし、その幻想が役立たなくなった今日、権力の崩壊を回避するため、支配層が露骨な力による支配をはかる可能性は十分にある。しかも、経済の混乱が《強力な政府》を要求しつつある現在、各方面で指摘されるようにその危険は大きい。

だが、たとえば、買占めや売り惜しみの防止が、政府機関に依存してではなくて、消費者による組織的な監視、あるいは

権力の集中化という体制そのものを問題とするのではなく、その枠内で分配をやや是正しようとするものにすぎなかった。したがって、高度成長路線の崩壊という事実の前で本質的な混乱に直面している点では、野党もまた変らないのである。

野党は、成長が福祉かというあの時代錯誤的なスローガンをかかげて、福祉社会を目指す、というだろう。だが、福祉とは何か。それは単に物質的な生存の保証、ただ生きながらえることの保証でしかない。しかし現代社会における人間の解放は、単に飢えないことだけではなく、政治や経済における決定権の集中、組織の巨大化の中で失われた、生きる意味や人間同士の結びつきの回復をも、あわせて追求することによって達成される。問題にされなければならないのは、各様の集中的な体制そのものである。その意味で、すでに旧左翼の時代は去っている。それなのに、もしいわゆる《革新》政権が、古びた主張を持ちだし、国有化や国家管理によって、政治権力と経済権力を一体化させるなら、現代社会における疎外状況、各個人から自分自身のものを奪っている状況、管理される悲惨さはますます過度のものとなる。

したがって、自民党政権が《革新》政権か、ということは、権力の座を争う当事者たちにはともかく、大衆にとっては何ら本質的な選択ではない。操作されるままにいるか自決するか、という点にこそ真の選択がある。

労働組合もまた、現在の事態を解決しうるものではない、

は、企業内の労働者による内部告発という形で行われるならば、それは大衆自身による社会管理に近づくとともに、ファシズムの危険を回避するものとなる。

### 「お疲れさん」という子ども

五 自決権奪還の闘いにとって、客観的には有利だが、主体的には不利な条件が多い。自立した運動はまだ少数だし、いくたびも裏切られながらも、いまだに政党に期待し、自主的にやるのは面倒だという空気が強く、自ら責任ある社会の主人であるよりも、奴隷の安逸を望むものが多いからである。それに、極度に管理されている社会の中で、動かされ操られることに慣れて、自主的に判断し行動することのできない、画一的な人間が増えているし、大量消費社会の中で異常に欲望を刺激され、与えられる安楽に慣らされて、人心は衰弱し荒廃し、新しい創造に必要な、連帯意識や倫理感覚も失われているし、大衆自身の管理能力も不十分である。その点を考えると、主体の側での自己変革、自己教育は不可欠のものである。

先だって私は、街を歩いていて、ある建物の透明なガラスの壁にぶつかった。頭が当たった。かなりの石頭だったのか、二、三平方メートルの分厚いガラスが一瞬にして垂直に崩れ落ちた。幸い素早く身を退いたために、顔も潰されず、文字通りほんのかすり傷ですんだが、頭を打ったので念のために翌日医者

にいつてみた。頭は一週間ほど少々狂っただけで治った(治ったつもりでいる)が、医者は別の病気を私の体内に見つけた。成人病の疾患である。節食と運動が必要だ、という。それで私は、食事に注意しはじめるとともに、根が《過激派》だから、適度にものをするを知らないで、毎日、近くのグラウンドにいつて二、三千米走ることにした。連日、欠かさずに走った。次第に疲れが残るようになったものの、そこを乗り切らなくてはというので、休まず走り抜いたのだが、十日目ほどでダウンし、医者にいつてみると、疾患が悪化している、一体どうしたんです、といわれた。

が、それはともかく、ある日、そうしてグラウンドを走っている時のことだった。隅の方の日溜りで数人の小学生たちが日向ぼっこをしていた。走る私を見ている子もいる。グラウンドを数周もした頃だったろうか、彼らの近くを走りかかると、一人の長髪の子供が、

「おじさん、何周目?」

と訊いた。私は回数をいつた。

そして、また一廻りして彼らのところに近づくと、さっきの子供が寄ってきて、手を伸ばして私の肩を叩き、

「お疲れさん!」

と、変な抑揚をつけていつた。子供らしい澀刺さのない子で、私には小型の中年男のように感じられてぞっとした。そしてまた一周してくると、こんどはそこにいつた数人の子供たちが

逸に慣れた人間を感じた。

操られるのが嫌なら、自ら責任を引受けなくてはならない。それはもちろん、必ずしも安易なものではなからう。しかし、困難との闘いが人間の生命に活力を与える。人間に自己を回復させる。人間を気高くする。

### 新しい社会への展望は

六 各個人が自分自身の生き方を決定できるような、新しい

社会の建設は、大衆組織それ自身によって行われる。それは、現行体制を告発しつつ、現在の非人間的な労働に代る新しい労働のあり方や、相互理解と合意と友愛にもとづく新しい倫理の追求、社会の主人としての労働者の自己教育、直接民主主義的な社会運営の訓練を行い、未来社会を用意しつつ現行権力を空洞化させる組織である。その組織の活動は、何らかの特定のイデオロギーの図式の下に進められるのではなく、その組織が当面する具体的な課題についての大衆討論を通じて決定されるものでなくてはならない。自決を目指すものが、その過程で、ある特定の人々に知的特権を与え、指導されたり操作したりするのを許すことは、やはり矛盾だろう。一時の間違いを恐れる必要はない。試行錯誤が私たちを教育し、私たちを養う。

未来を拓くのは、一面現行社会の告発であり、一面新社会の建設である活動だが、しかし、厳しい自己批評を伴わない

みな私のところに走り寄ってきて、私の体にそれぞれさわって、全く同じ抑揚で、

「お疲れさん!」

というのだった。まさしく小さいサラリーマンたちのような合で、私は薄気味わるかった。あるいは、この「お疲れさん!」という変な抑揚は、テレビ辺りでやっているのかもしれないが、子供らしい元気をほとんど感じさせないその少年たちを見て私は、思いすごしかもしれないけれども、現在の管理社会の中で鋳型にはめられ、生気を抜かれた人間の象徴を見る思いをした。それは、他人の表現を借りなければ、自分の気持も表わせない、ないしは持つこともできない人たち、そのかさねやすい衝動的な、しかも無気力な人たちであるが、そんな風な人たちが大多数である限り、自決を目指すことはおよそ心許ない、と思わざるをえなかった。そうした気力のない受身の態度を打破するには、たとえば水俣の患者支援闘争がそうだったような、魂をゆさぶるような、まさに懦夫をして立たしめるような、模範的な行動が必要だろう、と私は感ずる。私はまた、ある労働組合の役員に、労働者が経営を管理するようにならなければ、云々と話しかけて、われわれが経営を管理するなんてとんでもない、そんな厄介なことは経営者に押しつけておいて、賃上げだけガッポリ要求すればいいんですよ、といわれたことがある。私はその役員に、奴隷の安

告発、人間への愛と新しい社会を建設する情熱に裏打ちされない告発、単なる憂さ晴らし、自己顕示欲の満足、英雄主義への陶醉にすぎない告発は、頽廃に向かい、建設的意義を失うことに、特に留意すべきだろう。新社会を用意する大衆組織としては、一応三つのものが想定される。

①労働者評議会 未来社会において、企業の労働者管理を行う組織であり、各種の異議申立てを通じて、企業権力に対する二重権力化を推進する組織。単に賃金、労働時間などの利益擁護のための闘争のみではなく、労働の性格、事業の社会性をも問題とし、企業運営に関する一切に介入してゆき、自治管理を準備する組織である。

②地域的な住民組織 未来社会において地域的自治管理を行う組織であり、地域住民の利害に関する各種異議申立てを通じて、国家権力および地方行政権力に対し、二重権力化を推進する組織である。

③ユートピア集団 一般にコミュニオンなどと呼ばれているもので、自発的な参加者の出資と労働によって運営される、農場、工場、企業、金融機関、学校など。新しい人間の倫理と慣行の確立のために、未来社会の祖型としての実験を行うもの。

これらの組織をただちに結成することは、幾多の点で難しい面もあるだろう。しかし、新しい社会を用意する活動は、

私たちひとりひとりのすぐ傍らに、いくつもあるに相違ない。自分でものを考え、自主的に判断できる人間になれば、それだけですでに権力の力は弱体化されよう。自分の生活を大切に、自分自身を失わせるものである商品、特に加工度の高い商品に依存せず、買わずに、自分自身の手間をかけた、金銭に換算して計られる豊かさではない、真に豊かな生活をすれば、それだけで現在の経済体制に打撃を与えることができらるだろう。功利的な関係ではなく、何か共通の志向にもとづいて人間関係を築いてゆけば、それは新しい友愛の関係を用意するものとなる。何らかの社会的不正に対して抗議して手を携えて立ち上がれば、それは大衆自身を組織化するきつかけとなるだろう。そして、現行体制下においても、企業活動や地方自治への参加、あるいは地方分権化、たとえば徴税権や教育権の地方自治体への奪還（そのための、企業における源泉徴収の拒否、検定教科書の使用拒否など）を推進すれば、それは自決権確立への有力な手がかりとなりうるだろう。

変革は、誰かの計画の下に、一挙に、という形では行われないう。そうではなく、どこかで行われた模範的な行動が次第に他に波及する、という形をとるだろう。変革は、ゆっくりと着実に準備され、そして何らかの契機で、急速に深められよう。

友よ、仲間たちよ、私は、人間であるためにとも腕を組みたい。

(イラスト・赤瀬川原平)

## パニック MEMO

●「黙っていられるか この日本」  
(一)首相が訪れたアジアの国で／日本の心日の丸が／焼かれたその日を忘れない／道義をなくし思想なき／日本をかれらは許さない／自由の台湾切り捨て／共産主義の中国に／おもねる日本を許さない／エコノミックなアニマルと／怒る心が日の丸をい／た／青嵐会こそ日の丸を／力の限り守り抜く／風のままにまに目先をかえさぬ／魂忘れた政治なら／青嵐会は許さない／(二)売り惜しみや買い占めがあるならば／悪徳企業があるならば／不当利益を取り上げろ／遠慮をせずにメスふるえ／政府はもつと強くなれ／革命めざす工作は／弱い政治にしのびよる／政治家自身腹すえろ／派閥権力なんのその／党利にこだわる政治なら／青嵐会は許さない／(三)敗戦をした日本に／押しつけられて三十年／いまの憲法続くら／悪の病根断ち切れぬ／私権制限土地改革／やらねばならぬことがある／国の守りはどうなるか／誰かがそれを言わぬなら／押しつけ憲法変わらない／自主憲法で前進か／憲法擁護で滅亡か／ひとりひとりが考えて

／日本の進路きめるとき／真の自由と安全は／努力なくしてありえない／この憲法を利用して独裁政権狙つてる／その恐ろしい陰謀を／青嵐会は許さない／(四)「教学德育」この字から／教育なる字が生まれ出た／いま教学はあるけれど／德育のない教育が／自分中心得手勝手／親兄弟も困もない／思想の混乱生みだした／一党独裁夢を見る／政治に走る教師たち／誰も見ない教室で／革命戦士育ててる／偏向している教育を／青嵐会は許さない。(サンケイ・一・二九・青嵐会の意見広告) ＊ご参考までに。

### ●風前の灯

美術ろろそくの輸出メーカーとして知られる三重県亀山市の亀山ローソク会社では、電力会社から正式な節電要請を受けていないが、電力危機のなかで、企業責任を果たし、社員の節電意識を高めるために、ろうそくの光で仕事を始めた。工場は危険なため、約四十五人が働く事務所ではスタートしたが、社員には「やっぱり暗いやー」という声も――。(東京・一・一四) ＊これにならって電力会社は電燈をつけています。